

バートランド・ラッセルのポータルサイトの運用管理等について

Operation and Management of the Portal Site for Bertrand Russell

松下彰良

Akiyoshi Matsushita

Email: matusitaster@gmail.com

0. はじめに

このワークショップで英国の哲学者バートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) のポータルサイトの運用管理について話をしてみないかとお誘いを受けた時、最初は躊躇しました。このワークショップのテーマは、「デジタル人文学と画像情報」ということですが、ラッセルのポータルサイトで画像もかなり使っていると言っても、画像情報について何か有益なことが言えそうもないということと、「デジタル人文学」という言葉もそれまで聞いたことがなかったため、自分にこのテーマにそった話ができるかどうか検討したいということで、少し時間をいただきました。

とりあえず、ウィキペディアで「デジタル人文学」の説明を読んで見ますと、「デジタル・ヒューマニティーズは、コンピューティングと人文科学諸分野との間の接点に関して調査、研究、教育、および考案を行なう学問分野である。」というようなことが書かれていました。

接点はありそうに思いましたので、1. バートランド・ラッセルについて、2. ラッセルのポータルサイトの概要、3. ポータルサイトの運用管理、4. ポータルサイトの利活用ーデジタル人文学の観点から、という4部構成で取り組んでみました。

1. バートランド・ラッセルについて

自然科学や社会科学の場合は、個人に関する知識は捨象できますが、人文科学の場合、特に思想家や文学者などの研究の場合、はそういうわけにはいきません。そこで、ラッセルについて、3点だけふれておきます。

1-1 現代の日本ではラッセルについて知らない人が多い

英米では教養のある人は、ほとんどの人がラッセルのことを知っています。しかし、残念ながら、現代の日本では教養のある人でも知らない人がけっこういます。ラッセルの紹介のされ方、また、多少知っている人のラッセルのイメージは、大体以下のようなものだと思います。

- ・英国の哲学者、数学者、論理学者、社会批評家、平和運動家、幸福論の著者
- ・1950年度ノーベル文学賞受賞者

- ・英国を代表する貴族の家系（第3代ラッセル伯爵、祖父は2度英国首相を務めたジョン・ラッセル卿）

1-2 日本で過去2回ラッセル・ブーム

日本でも、大正時代と1960年代の2回ラッセル・ブームが起こり、教養のある日本人の多くがラッセルを知っていました。

大正時代の人々がなぜ知っていたかという点、ラッセルは第一次世界大戦に反対し、不服従運動をしたために逮捕されて刑務所に約5ヶ月入れられ、当時世界的に報道されることが一番影響しています。また、大正10年の夏にラッセルが来日したときには、朝日、読売、毎日等の新聞が1日も欠かすことなく大きく報道しました。（写真：来日時のラッセル。真ん中がラッセル、向かって右端がラッセルを日本に招いた改造社社長山本実彦氏）



1960年代にもう一度ラッセル・ブームが起こり、いろいろな関係団体が設立されました。核兵器撤廃を訴えた「ラッセル＝アインシュタイン宣言」を1955年7月9日に出し、世界的に話題になり、広島や長崎に原爆が投下された日には日本の平和団体や反核団体とタイアップした関係でしばしば報道され、多くの人が知るようになりました。また、1960年代後半には日本バートランド・ラッセル協会ほか、ラッセル関係団体が多数創設されています。

1-3 デジタル人文学の視点の重要性

ラッセルは膨大な著作を執筆しており、生前に出版したものが約70種（約80冊）冊、雑誌論文等が数千点、書いた手紙は数万点あると言われていますが、現在残っている手紙は、晩年に結婚したラッセルの4番目の奥さんが保存していた1952年からラッセルが死亡する1970年までのものが中心です。

カナダのマクマスター大学のラッセル・アーカイブでは、ラッセルが受け取ったもの

も含めて 10 万点以上の書簡を所蔵しており、インターネット経由で書誌情報の検索できるようになっていました。また、生前に出版されなかった著作を、マクマスター大学の研究者を中心に 1983 年から *Collected Papers of Bertrand Russell* というタイトルで出版していますが、40 年近くかかっているのにまだ完結していません。

そのような膨大な関連情報があるラッセル及びその思想に取り組む場合には、ラッセルの全著作をデジタル化し、全文検索システムを利用するなど、デジタル技術を活用しないとまともなラッセル研究は困難だろうと思われます。できればテキストの DB 化だけでなく、ラッセル関係の写真、肉声、TV インタビューの映像などもたくさんありますので、それらもデータベース化する必要があります。もちろん、「あらゆる」情報の収集というのは個人では不可能なことであり、「特に制限を設けないという意味合い」です。あらゆる情報の収集は、カナダのマクマスター大学にあるラッセル・アーカイブに期待します。

2. ラッセルのポータルサイトの概要

ラッセルのポータルサイト開設の趣旨、ポータルサイトの構成、及び、主なコンテンツについて、以下、簡単にご紹介します。

2-1. 開設趣旨

ラッセルのポータルサイトを開設した当初の趣旨は以下の 3 つでした。

- 1) ラッセル関係のあらゆる資料や情報を、ラッセルの研究者およびラッセル・ファンに対し提供すること
- 2) ラッセル関係者に交流の場を提供すること
- 3) 読書会 {「ラッセルを読む会」} で活用すること

「ラッセルを読む会」というのは、松下が 1980 年に立ち上げ、以後 40 年ほどやっている読書会のことです。

ラッセルのポータルサイトの目的はその後いろいろ増えていきましたが、開設当初の意図は主にこの 3 つでした。

2. 2 ポータルサイトの構成等

ポータルサイトは、本館+分館+初心者用ページからなっています。

英語のメニューの他に、スマホ用メニューも用意していますが、スマホ用に最適化したページはまだわずかです。

現在の情報量は html ファイルにして約 10,000 件あり、画像も約 3,000 件あります。

2-3 主なコンテンツ

ポータルサイト掲載の主なコンテンツについて、A~F の 6 つのグループにおいて、簡単にご紹介します。なお、掲載しているコンテンツについては、Facebook, Twitter, Pinterest, Tumblr 等でも投稿するとともに、メルマガ 3 誌 (「ラッセルの英語」や「(ラッセルの言葉」

など)を magmag 無料メルマガ発行サービスを利用して一般読者に提供し、ポータルサイトとの連携をはかっています。

(1)コンテンツ A ラッセル文庫、ラッセルを読む会関係等

「ラッセル文庫」は 1983 年から 10 回にわけて早稲田大学（教育学部教員図書室）へ松下が寄贈したラッセル関係資料約 2,000 点のことで、所蔵目録を掲載しています。

「ラッセルを読む会」は今年の 10 月 19 日に第 211 回目を開催しました。

(2)コンテンツ B 『ラッセル書誌_第 3 版』及び「ラッセル詳細年譜」等

1)著作年表

『ラッセル書誌_第 3 版』は 1986 年に松下が私家版で出したもので、国会図書館など約 10 箇所の大規模図書館に寄贈しており、それらの図書館の参考室等に置かれています。『ラッセル書誌』の最初にラッセル著作年表(画像 1)を置いています。これにはラッセルが執筆した著作(単行本及び論文等)約 1500 点を、原則として発表年月順、発表されていないものは執筆年月日順に並べ、邦訳のあるものは「T」印をつけ、邦訳文献一覧のページでその詳細な内容を記述しています。(注:画像はホームページの画面をキャプチャーして一部を切り抜いたものです。)

Sample 邦訳あり

←前ページ ↑年表の最初 →次ページ

執筆or 出版 年月日	邦 訳	一連 番号	書誌データ(タイトル、出版事項等)
1930 (58歳)	T	28	<u>The Conquest of Happiness.</u> ←『幸福論』の原著 London, Allen & Unwin, 1930. 252 p. 20 cm.
1930/01/16 (58歳)		0451	How I was educated. In: Forward, 9 Mar. 1930 所収.
1930 (58歳)		0452	China's philosophy of happiness. 雑誌論文 (初出の) 掲載誌名 In: Thinker, v.1,n.4?: Feb. 1930, pp.16-23.
執筆年月日 1930 (58歳)	T	0453	<u>Homogeneous America.</u> (再録図書名)後に出版されたエッセイ集 In: Outlook and Independent, v.154: 19 Feb. 1930, pp.285-287, & 318. * Repr. as 'Modern homogeneity' in: (32)In Praise of Idleness, and

2)原著の出版状況

原著の初版や改訂版の書誌事項・出版事項、目次、国内の主要図書館での所蔵状況等を記載しています。英米を中心とした出版状況ですが、わかるものは英米以外にもあげています。ちなみに、所蔵館のところの「RC」というのはラッセル・コーナー、つまり、早稲田大学のラッセル文庫で所蔵しているものです。

3)訳書の出版状況

日本で出版されたラッセルの著作(単行本及び雑誌論文等)の邦訳を網羅的に列挙しています。たとえば、ラッセルの「幸福論」については、10種類、出版年順にリストアップしています。『ラッセル幸福論』は1930年が初版ですが、翌年の1931年には日本語訳がだされています。

4)「ラッセル書誌」目次

画像2は、『ラッセル書誌-第3版』の目次です。

松下彰良(編)『バートランド・ラッセル書誌_第3版』目次	
表紙画像(Title page) 編集ノート(Preface) 凡例	
I. 著作年表 Writings by B. Russell: Chronology ・ 著作年表(全体) 著作年表(単行書)	- B. 邦語文献(続き) Japanese (cont.) 2 b. ラッセル紹介・評伝 Introduction 2 c. ラッセルに関するエッセイ Essays on B. Russell
II. 原著(単行書) Writings by B. Russell: Monographs	2 d. 書評・解題等 Book Reviews 2 e. 書簡 Correspondence 2 f. 雑(含む、ノーベル賞授与関係、月報)
III. 翻訳 Translation	Other printed materials
- A. 各国語訳 Foreign Languages	2 g. 視聴覚資料 Audio visual Materials
- B. 邦訳 Japanese	2 h. 児童図書 Juvenile
1. 著作集、選集等に収録	3. ラッセル関係新聞雑誌記事 Articles
2. 単行書あるいは雑誌等の一部に収録	4. ラッセル協会関係 ラッセル協会(全般) ・ 会報・総目次 Index to Bull. of the BRS in Japan
IV. ラッセル関係文献 Writings about B. Russell	5. ラッセル平和財団日本資料センター資料 Index to Materials pub by BRPF in Japan
IV-A. 外国語文献 Foreign language	6. ラッセル=アインシュタイン宣言 Russell-Einstein Manifesto
1. 単行書 Monographs	7. パグウォッシュ運動及び会議 Pugwash Movement and Pugwash Conference
2. 逐次刊行物及び単行本の一部に収録	・ 付録：科学者京都會議 Kagakusha Kyoto Kaigi
2 a. 研究・評論 Papers	8. CND、百人委員会 CND; Committee of 100
2 b. 書評・紹介等 Book Reviews, etc.	9. ラッセル法廷 Russell Tribunal
2 b 1. ラッセルの著作 Reviews: Works by Russell	10. 学位論文、卒論・ゼミ論 Terminal Papers, etc.
2 b 2. ラッセル研究書 Reviews: Works about Russell	11. その他 Miscellaneous
2 b 3. 紹介；追悼記事 Brief introductions, obituaries.	
2 b 4. 関係書 Others.	付録 Appendix
2 b 5. 視聴覚資料 Audio Visual Materials.	- A. 語学用テキスト School Texts
3. ラッセル文書館報・総目次 Index to russell	- B. ラッセル年譜 Biography
・ 米国ラッセル協会会報目次 Index to BRSQ	- C. 参考文献リスト References
4. ラッセル研究学位論文 Dissertations	
IV-B. 邦語文献 Japanese	索引 Index
1. 単行書 Monographs	タイトル索引(工事中) Title Index (under construction)
2. 紀要・雑誌等に収録(未整理) Papers	
2 a. 研究・評論(年代順/主題別) by subject	

(3) コンテンツ C ラッセル関係写真 及び「ラッセルの言葉」(各種引用)

1) 牧野アルバム及び松下ラッセル紀行などのラッセル関係写真集

牧野アルバムは牧野力氏(早稲田大学政経学部教授)の遺族から(遺言ということで)頂いた資料のなかに含まれていた写真のネガを電子化したものです。因みに、頂いたラッセル関係の牧野蔵書約100冊は、松下がほとんど持っていたので、ラッセル文庫の貸出専用図書としました。「松下ラッセル紀行」というのは1980年に松下がラッセルのゆかりの地を尋ねた時に写した写真集です。

2) 「ラッセルの言葉 366_画像版」

これは毎日投稿しているものでお薦めしたいものです。ホームページでは、ラッセル著書等からの引用文下に引用元の URL を記述してあり、それをクリックすると引用文の前後の文章（多くの場合は全文テキスト）を閲覧できます。「画像版」と名付けているのは、画像がついていることと、文字も画像にしているためです

(4)ラッセル協会出版物、ラッセル英単語・熟語集、利用限定情報等

1)ラッセル協会出版物

日本バートランド・ラッセル協会の会報やパンフレット等を電子化したものです。ラッセル協会の事務局を最初から最後まで担当していた牧野力常任理事が早稲田を定年退職された時、牧野氏からラッセル協会の資料を譲渡されました。ラッセル協会の常任理事数人が話し合って松下に託すということになったようです。

また、著作権などの関係で、利用者限定コンテンツをパスワード付で読書会の会員等に提供しています。

2)『ラッセル英単語・熟語 1500』の無料版

Google 検索でラッセルのポータルサイトを指定してキーワード（単語、フレーズ等）で検索すると、ラッセル関係の様々な情報を入手可能です。即ち、

site:<https://russell-j.com>

と入力し、その後にキーワードを入力して検索すればポータルサイトにあるラッセル関係の様々な情報を検索できます。そのようにして編集したものに『ラッセル英単語・熟語 1500』（アマゾンの電子書籍 kindle 版）があります。同書に収録したラッセルの著作の例文の情報源のところのリンク表示をクリックするとラッセルの文章を引用しているテキストの前後（大部分の場合フル・テキスト）を閲覧できます。同書のコンテンツは **magmag** の無料メルマガ「ラッセルの英語」で全て提供済です。

(5)コンテンツ E ラッセルの著書の全訳（対訳）

・ラッセルの著作7種類9冊（「ラッセル自伝」「幸福論」「教育論」「結婚論」「権力」「宗教と科学」「アメリカン・エッセイ集」）を全訳/対訳（松下訳）で提供しています。現在10冊目（『私の哲学の発展』）をポータルサイト及びメルマガ「ラッセルの言葉」で提供中です。

(6)コンテンツ F アマゾンの Kindle で販売中のラッセル関係電子書籍一覧

アマゾンの電子書籍（Kindle）で、ラッセル協会の会報なども含めて、50点ほどを販売しており、その案内を掲載しています。

3. ポータルサイトの運用管理

ラッセルのポータルサイトの開設から現在までの経緯、サイトへのアクセス状況、現在の問題点と対応及び、今後の課題について以下記載します。

3-1 開設から現在までの経緯

1996年8月8日に Just System の JustNet 上にラッセルのポータルサイトを開設しました。その後、下記のような経緯を経て、(株) さくらインターネットが提供しているサーバのレンタル契約をし、現在にいたっています。

1) Just System の JustNet 上にポータルサイト開設 (1996.8.8)

1年半で「波乗り賞」受賞

2) Cool Online 上にホームページ用スペースをレンタル

3) Infoseek が Cool Online を吸収

4) Infoseek は楽天に買収されホームページ用スペース提供サービス終了

5) (株) さくらインターネットのレンタルサーバを契約しドメイン名 (<https://russell-i.com>) を取得するとともに、暗号化に対応

これまで約24年間、ポータルサイトの運用管理をしてきましたが、その間、ネット環境の変化及びIcT技術の進歩等にあわせて、ITの専門家でない個人ができる範囲の対応をしてきました。

2019年5月末まで順調にアクセス数が増加しました(月間アクセスはセッション回数で約10,000件、ニーク人数で約8,000人になりました。ところが、後述するように、2019年6月におけるGoogleによる検索アルゴリズムの大幅なアップデート(いわゆる

Panda Update)により、以後3ヶ月間に約40%近くアクセス数が減少してしまいました。

9月からSEO(Search Engine Optimization)対策を開始し、少しずつアクセス数は復旧中です。以上が、これまでのおおざっぱな経緯です。

3-2 サイトへのアクセス状況—Google Analytics による分析

ポータルサイトへのアクセス状況について、ユーザの地域分布、よく閲覧されているコンテンツ、利用機器別アクセス状況の3点について、以下にご紹介します。

3-2-1. ユーザの地域分布

Google Analytics を利用して2018年11月1日から2019年10月31日までの1年間について、ポータルサイトへのアクセス状況を見ると、一部の地域(北朝鮮、キューバ、グリーランド、トルクメニスタン、西アフリカ等)を除いて、ほとんどの国や地域からアクセスがあります。

この1年間のアクセスは約10万件ですが、国別のアクセス件数のトップ10を見ると、日本国内からのアクセス(約60,000件)が断トツなのは当たり前ですが、英語圏の米国(約9,000件)とパキスタン(約8,000千件)とインド(約7,500件)が抜きつ抜かれつの状態です。特に注目すべきは、中国(約1,600件)から及びラッセルの母国のイギリス(約1,600件)からのアクセスの少なさです。中国はインターネットの利用が制限されているからですが、ネットが自由化したら、中国からのアクセスが一番多くなるだろうと想像されます。なお、11月上旬に中国語のメニューだけ用意してみました。どのような影響がでるか、関心をもっています。日本国内からのアクセス(都道府県別)は、東京(22,155件、約37%)、

神奈川県 (7,616 件、約 12.7%)、大阪府 (6,571 件、約 11%) がベスト 3、人口の少ない鳥取県からが 63 件 (0.11%) で最も少なくなっています。

3-2-2. よく閲覧されているコンテンツ

最もよく閲覧されるラッセルの著作は、**画像 3** のように、*The Conquest of Happiness* (いわゆる「ラッセル幸福論」の原著全文) が断トツです。他には、教育論、結婚論などの英文フル・テキストの利用が多くなっています。なお、*The Conquest of Happiness* のページビューが 22,423 ページとなっていますが、フル・テキストが 1 ファイル (つまり 1 ページ) なので、他の著作のページビューとは意味合いが異なります。

注目されるのは、たった 3 ページくらいのエッセイである *The Triumph of Stupidity* (1933 年執筆) が 8 位にランクインしていることです。最近では 1 年間に 2,500 件くらいに落ち着いていますが、数年前、2 日間で約 2 万件のアクセスがあり、同時アクセス数も 250 件以上を越えることもありました。Google Alert で注意喚起のメッセージが届いたときにはビックリしたのを鮮明に記憶しています。

ページ ?	ページビュー数 ?	ページ別訪問数 ?	平均ページ滞在時間 ?
よく閲覧されるコンテンツ (ほとんどがラッセルの英文)			
	231,183 全体に対する割合: 100.00% (231,183)	172,624 全体に対する割合: 100.00% (172,624)	00:01:51 ビューの平均: 00:01:51 (0.00%)
1. /beginner/COH-TEXT.HTM	22,423 (9.70%)	18,271 (10.58%)	00:04:17
2. /index.htm	7,141 (3.09%)	5,215 (3.02%)	00:01:08
3. /beginner/KOFUKU.HTM	5,521 (2.39%)	3,466 (2.01%)	00:00:34
4. /beginner/ON_EDU-TEXT.HTM	4,450 (1.92%)	3,914 (2.27%)	00:04:32
5. /1073-KW.HTM	4,347 (1.88%)	3,584 (2.08%)	00:05:10
6. /NEWINDX.HTM	3,341 (1.45%)	1,692 (0.98%)	00:02:05
7. /wp/index.htm?p=3390	2,876 (1.24%)	1,349 (0.78%)	00:00:29
8. /0583TS.HTM	2,468 (1.07%)	2,136 (1.24%)	00:03:40
9. /beginner/MaM1929-TEXT.HTM	2,376 (1.03%)	2,114 (1.22%)	00:04:13
10. /beginner/HAP11.HTM	2,190 (0.95%)	1,805 (1.05%)	00:00:28

どこからアクセスしてきているのだろうと、Google Analytics でみたところ、ハッカーの人たちが集まるサイトのようなものでした。ハッカーといっても良いハッカーのことで、悪いハッカーはクラッカーといって区別しています。こういった人たちは権威が嫌い、反体制的なので、ラッセルのある一文が気に入ったのだと想像されます。それは「困ったことに、愚か者や狂信者はいつも自信満々だが、賢い人たちは疑念だらけである」という一文です。このエッセイはラッセルが 1933 年に書いたものです。

3-2-3. 利用機器別アクセス状況

利用機器別アクセス状況を見ると、モバイル(スマホ)が 52%と 5 割を越えており、デスクトップ PC が約 40%となっています。数年前はモバイルが 30%でしたが、あっという間に逆転してしまいました。そのため対策も後手にまわってしまいました。

機種別では、アップル関係が全体の 55%くらいをしめており、iPhone がなんと 48%をしめています。日本のスマホがでてきていません！ 多分、「不詳」と書いてある機種のなかにあるのですが、影が薄いと言わざるを得ません。

3-3. 問題点と対応

3-3-1. Google Update への対応

ラッセルのポータルサイトの維持管理にとって現在における最大の問題は、2019 年 6 月 4 日に行われた Google の検索コア・アルゴリズムの更新、いわゆる Google Panda Update によって、アクセス件数が激減してしまったことです。即ち、5 月末までは少しずつアクセスが増え続け、月間アクセス（セッション数）は 1 万に達していました。ところが、Google Panda Update 以後 3 ヶ月間の間に、アクセス件数が約 40%減ってしまいました。8 月末に底になり、その後、検索エンジンに対する最適化、いわゆる SEO に取り組み、少しずつ回復してきていますが、もとにもどすには相当時間がかかりそうです。

Google の公式アナウンスは「コンテンツの充実を！ それ以外対策なし」と言うばかりですが、ラッセルのポータルサイトは毎日コンテンツの充実に努めており、他に原因があるはずです。困難にぶつかって初めて反省しますが、そういえば今年の 1 月に Google から「モバイル ファースト・インデックスの有効化のお知らせ」というメールが届いていましたが、無視していました。根本的対策は、スマホ用コンテンツ(htm5,UTF8)を少しずつ増やしていく必要がありますが、時間がかかるために、とりあえず以下の緊急対策を実施中です。

1)各 html に必ず<h1>~</h1>大見出しタグを挿入するとともに、横幅を少し狭める

2)Google Search Console（というツールで）でエラーとなっているコンテンツの html を修正する。

3-3-2. 知的財産権や著作権への対応

学術的なものはできるだけ著作権フリーになってほしいと思いますが、著作権制度は度々改定され、著作権者の権利拡大（保護期間 50 年→75 年）に向かっています。

<著作権保護の状況>

A.1922 年以前 著作権登録制度なし

従って、ラッセルの原著もかなり無料で提供されており、著作権の心配はありません。

B.1923~1963 年 著作権登録されたものだけ著作権保護の対象

C.1964 年以降 登録されなくても全て著作権は保護

A の期間は、安心してラッセルの著作を電子化して提供可能ですが、B の期間は要注意です。しかしできるだけポータルサイトにラッセル関係のコンテンツを掲載したいので、B の

期間のものについては、ポータルサイト開設趣旨のところに不都合なことがあればご連絡くださいとのお願いを載せています。

3-4 今後の課題

今後の課題として以下のことがあげられます。余白の関係で、項目だけ列挙します。

- 1 新しい技術の取り入れ（キャッチアップ）
- 2 継続性（の維持） サステナブルなサイト
3. サイトの終活(?)

ポータルサイトの全情報を DVD に収録して国会図書館に納本したり、Kindle で無料化（コモンズ化）したりして提供するなどの対策が考えられます。

4. ポータルサイトの利活用ーデジタル人文学の観点から

これは **question mark** 付きです。このワークショップのテーマが「デジタル人文学と画像情報」ですので、デジタル人文学に関係しそうなことを少し書いてみたいと思います。

ラッセルのポータルサイトは、研究支援サイトとして、教育・学習支援サイトとして、また、教養・娯楽サイトとして利活用できると考えています。

4-1 研究支援サイトとして利活用

ラッセルのポータルサイトを研究支援サイトとして活用する例として、ラッセルに関する事実確認に使う例と、ラッセルが著書で使っている言葉の意味合い把握のために使う例を以下ご紹介します。

4-1-1 ラッセルに関する事実確認

ラッセルに限らず、膨大な著作があり、いろいろなところで発言しているような人物（ここでは故人）について研究する場合は、前述のように、網羅的なデータベースを構築し、全文検索システムや AI を活用した検索ができることが望まれます。（ちなみに、Google は、今後 Google 検索に AI を活用するとアナウンスしています。）

そういった多面的で膨大な関係情報がある人物の場合は、数冊の著書を読むだけで評論することは非常に危険であり、断定的な言い方をするのは控えたほうが安全です。しかし、自分の専門分野については、慎重に発言する研究者も、専門から少し離れたことについては裏付ける証拠を持たずに「言いすぎて」しまうことがけっこうあります。

ラッセルの場合は、1 万件の情報を蓄積しているこのポータルサイトを是非、ラッセルに関する事実確認のために（研究支援サイトとして）利用していただきたいと考えています。

ここでは、先入観に基づいて間違っただけで判断をしてしまっている例として、福田和也氏（慶應義塾大学教授で文芸評論家）の『大丈夫な日本』（文春新書）をとりあげてみます。これは学術書ではないので、ある程度はあいまいな書き方をしても許されますが、根拠もなく

「断定」している場合には、研究者としては傷がついてしまいます。

福田氏は、『大丈夫な日本』でラッセルは同性愛者だと「断定」しています。ラッセルが同性愛者であればここでとりあげることはない（また、ラッセルは自分が同性愛者であれば隠すような人間ではない）ですが、事実確認を怠った例としてご紹介します。『大丈夫な日本』（p.125）にこう書かれています。

「・・・。ロレンス自身は、第一次世界大戦のときには2つの大きなショックを受けています。彼は反戦的だったし、友人であった哲学者バートランド・ラッセル、経済学者ケインズもそうでしたが、このふたりは同性愛関係でした。戦争中、ラッセルらの招きに応じて、ケンブリッジ大学に滞在した時のことです。ある晩、ラッセル邸に宿泊したロレンスは、寝室から降りてきたケインズのパジャマ姿を目撃する。ロレンスは、ケインズの姿に、かつて見たことのないような醜悪さを見出します。それは単純に、同性愛の匂いに反応したのではない。むしろ 20 世紀の天才経済学者、おそらく当時のイギリスの、最高の知性人のなかに、底知れぬ醜悪なものを見てしまった。その知性の核心から匂ってくる腐臭をまざまざと嗅いでしまったのではないのでしょうか。・・・。以下省略（同書 pp.125-127 に記述）

福田教授は『ラッセル自伝』に書かれていることを、先入観を持って読まれたのではないかと想像されます。ラッセルに親しんでいる人なら、福田氏のこの記述はどこかおかしいと思うはず。

Google 検索で、ラッセルのポータルサイトを指定して、「同性愛」というキーワードで検索すると 100 件ほどひっかかります。それを読んでいけば福田教授の考えは間違っているようだということがわかると思います。なぜ間違いかという決定的証拠は、ミランダ・シーモア『オットリン・モレル、破天荒な生涯 -ある英国貴婦人の肖像』（彩流社、2012 年 7 月刊。viii,734 + 39 pp.）という本を読めばすぐにわかります。（ラッセルのホームページに要約を掲載してあります。） 同書 p.329）にこう書かれています。

「初めからロレンス（D. H. Lawrence）の悪意があろうはずがなかった。（1915 年）三月、ケンブリッジを訪問して、その地に（ロレンスが）見つけた同性愛的共同体にロレンスが嫌悪感を表した時、ラッセルはそういうロレンスを熱烈に支持し、「ロレンスは男色に僕と同じ反感を持っているとオットリンに語り・・・」（以下省略）

4-1-2 言葉の意味は時代によって変化

ことわざの意味が時代によって変化してきていることがよく話題になりますが、ラッセルの著書で使用されている用語の意味も時代とともに変わっているものがありますので、注意が必要です。“communism”や“pacifist”もそういった言葉であり、ラッセルも時々嘆いています。ここでは、“communism”の意味の変化だけご紹介します。

「ラッセルは共産主義に好意を持っている」と誤解する人がたまにいます。その原因の一つは“communism”の意味の変化があります。1917 年にロシア革命が起こるまでは、“communism”という言葉は「社会主義」という意味で使われることも少なくなかつ

たようです。ラッセルに親しんでいる人なら、ラッセルは社会主義者ではあっても、共産主義に好意をもっているはずはないとわかるはずですが、あまり知らない人は誤解する人がいます。その場合は、”communism”あるいは“共産主義”という言葉でラッセルのポータルサイトを検索して見てください。検索結果をブラウジングすると次の情報を得ることができるはずです。

The Practice and Theory of Bolshevism, 1920 の第2版(1948年刊)へのノートから

「この本は1920年に書かれたものだが、2点を除いて訂正なしで再版される。新しい用語法にならって多くの箇所で「共産主義」という語を「社会主義」に変えた。1920年には、この2つの言葉の間に今日存在しているような鋭い区別はまだなかったから、このように訂正しなければ間違った印象を与えることになるであろう。」

4-2 教育・学習支援サイトとして利活用

ラッセルのポータルサイトは、教育・学習支援サイトとしていろいろな使い方があります。ここでは、大学受験生の英語学習支援サイトとしての利用例を2つ以下ご紹介します。

(1) 高校生や大学受験生がラッセルの英文で英語学習

ラッセルの英文は模範的な英語として世界的に評価が高く、英語学習に利用しない手はありません。今は実用英語中心なのでラッセルの英語が大学入試で出題されることはあまりなくなっていますが、もったいないことです。(1960年代~1970年代には、ラッセルの英文を10大学くらいで出題していました。)

ラッセルのポータルサイトを指定して、下記の例のように、キーワード(単語やフレーズ)で検索すれば、ラッセルの著作での用例が非常に多数ひっかかりますので、是非活用していただきたいと思います。

site:<https://russell-j.com/> kewrord1 keyword2

例1 site:<https://russell-j.com/> absurd [不合理な; 馬鹿げた]

例2 site:<https://russell-j.com/> 'come of age' フレーズ

余白の関係で詳細は省略します。『ラッセル英単語熟語1500』(アマゾンの電子書籍 kindle)で提供していますが、無料版(内容は有料版とほぼ同じ)を次のページに掲載していますのでご利用ください。

<https://russell-j.com/beginner/reitan-idx.htm>

2) 誤訳例を見ると英文の理解に役立つ

市河三喜賞を受賞した安藤貞雄先生は2年半前に亡くなっていますが、ラッセルの一般読者向けの著書の『幸福論』, 『教育論』及び『結婚論』の訳者としても有名です。安藤先生が出された岩波文庫の3冊は名訳です。安藤先生は、私が足元にもおよばない英語学の大家ですが、安藤先生の翻訳で10箇所くらい誤訳ではないかと思い、ホームページの松下訳の中で指摘しています

私が誤訳を指摘していると、誰かに聞かれたのだと思いますが、大分前に安藤先生

からメールがあり、内容を問い合わせられました。5つほどお知らせして、私の勘違いであれば教えてくださいとお願いしましたがその後連絡はありませんでした。

一つだけご紹介しておきます。「one day」というのは、「ある日」という意味だけでなく、「いつの日か」という意味で副詞的に使われることがあります。私が誤訳ではないかと指摘したのは、ラッセルの『教育論』(On Education, 1926)の中の次の英文です。(https://russell-j.com/beginner/OE10-060.HTM)

Mill relates in his Autobiography that during adolescence he nearly committed suicide from the thought that all combinations of musical notes would one day be used up, and then new musical composition would become impossible.

(岩波文庫版の)安藤貞雄訳も、(みすず書房版の)魚津郁夫訳も、(角川文庫の)堀秀彦訳も全て、「J. S. Mill は、あらゆる音符の組み合わせは一日で使い果たすことができるので、新しい作曲が不可能になると考えて、自殺しかけたことがあった、と語っている」と訳されています。

「あらゆる音符の組み合わせが一日で使い果たすことができる」なんてことは、常識的に考えてありえないことです。論理学者でもあったミルらしく、音符の組み合わせ(のできる楽曲)は膨大かもしれないが、その組み合わせは有限なものであるから、いずれ新しい曲など作れなくなってしまうという「強迫観念」にかられてしまった、というのが正解と思われます。つまり、「one day」は「1日」ではなく、「いつの日か(someday)」という意味のほうです。

英語が出来る人でも、先入観にとらわれると誤訳をしてしまう一例だと思われます。ラッセルに関しては、疑問に思ったら是非ラッセルのポータルサイトで確認していただければ幸いです。なお、ラッセルのポータルサイトで「誤訳」というキーワードで検索すると、200件以上ひっかかります。他人の誤訳探しはあまりよい趣味ではないですが、参考になるものと思われます。

3)外国人で日本語の勉強に使っている人もいる

ポータルサイトを活用してくれている人たちから時々お便りのメールをいただきます。どこの国の方かわかりませんが、ポータルサイトに掲載している対訳などを日本語の勉強に使っているとのメールを今年いただいたことがあります。

4-3 教養・娯楽サイトとして利活用

最後は、教養・娯楽サイトとしての利活用についてです。ラッセルのポータルサイトは、教養・娯楽サイトとして楽しめるコンテンツも多数掲載しています。また、読書のお供として、ラッセルを引用している本があったら、この著者がラッセルについて言うことは本当かどうか検索して確かめてみるという活用法も勧めです。

ラッセルが楽しみとして最も多く読んだのは文学、次は歴史書とのことです。そういった幅広い読書の反映(賜物)と思われるが、ラッセルの著書には興味深い具体的な話が多数引用されています。また、ユーモアあふれる表現が多用され、論理学(『数理哲学入門』な

ど)の本にも突然冗談がでてきたりしてビックリします。

以下、教養・娯楽サイトとしての利活用に関係した事柄について、「ラッセル落穂拾い」からご紹介します。(<https://russell-j.com/beginner/ochibo-2019.htm>)

「ラッセル落穂拾い」(初級篇及び中級篇)は、ラッセル関係文献「以外」の図書などでラッセルに言及しているものを400冊くらい拾ったものです。多種多様ですので楽しむと思われれます。

ラッセルに言及しているのは研究者が多いのは当然ですが、ここでは研究者以外の著名人(日本人作家)に限定して、ラッセルについて言及しているものを以下、(著者名の五十音順の最初の方の)5例だけ、列挙しておきます。

1)池澤夏樹『叡智の断片』(集英社, 2007年12月) pp.47-52 「愛国心について」の p.50

「なぜか愛国心には命がかかる。そこがばかばかしい。バートランド・ラッセルは「愛国心とは、些細な理由のために喜んで死にたがることだ」という。幸い、竹島・独島ではまだ誰も死んでいないけれど、日韓関係全体から見てあの小さな岩礁が些細なことであるのはまちがいない。

国というと熱くなる人がいる。政治家はそれを利用する。唯一の祖国なのだから愛せと叫ぶ。民族や国籍は選択の余地がないのだから愛さなければ損だ、という奇妙な論法。

2)井上ひさし(作)『(小説)ドン松五郎の生活』(新潮文庫, 1978年5月) p.8

「・・・英国の哲学者のバートランド・ラッセルはいみじくも申しております。'愛を怖れることは人生を怖れることである。そして、人生を怖れる者は、すでに十中八、九は死んだも同然である'、と。あなたがたは今の上では生きながら死んでいるのと同じです。いまこそひたすら愛し合い、そのことによって生きるべき時なのではないでしょうか・・・」

「愛を怖れることは人生を怖れることである' 素晴らしい言葉だなあ。たしか、バートランド・ラッセルはノーベル文学賞も受けているはずですがね、ぼくはなぜ哲学者が文学賞か、これまでよくわからなかったんです。でも、これでやっとそのわけが理解できました」

3)猪瀬直樹『マガジン青春譜ー川端康成と大宅壮一』(小学館, 2002年)] p.186

「・・・。折よく、『改造』の山本社長が招聴した哲学者バートランド・ラッセルが来日した。ラッセルはこのとき四十九歳である。第一次大戦に反対して投獄されたうえ、国外追放処分になっていた。(松下注:ラッセルが敵国=ドイツと交信をしないとということで、英国の海岸に近づくことは禁止されたが、国外追放処分の事実はない。)ケンブリッジ大学教授の座を失ったラッセルは、中華民国に逃れて北京大学で教鞭をとっている。(松下注:北京大学から招聘を受け、約1年間中国にいったが、中華民国に逃れたわけではない。)著名なラッセルの来日を新聞が取り上げるに違いない。そこで山本は、ラッセルに渦中の賀川を会わせることにした。ラッセルが神戸

港に着くと、造船所のブルーカラーが旗を押し立て労働歌を歌いながら迎えた。もちろん、先頭に賀川がいる。こうして劇的な出会いが演出された

4)江戸川乱歩(編著)『推理教室』(河出書房新社,1959年)]

「……。推理小説には二つの重要な特徴がある。その一つは、殺人などの悪事を描くことによって、人間の心の底に存在する原始本能を解放する作用を持っていることで、世界最高の平和論者バートランド・ラッセル卿もその著書『権力と個人』の中に左のように書いている。「いつか戦争というものが絶滅されるであろうという希望を抱くものは、原始時代の永い世代を経て遺伝されてきた人類の残虐本能を、いかにすれば無害なものに転換させることができるかということ、真剣に考えなければならない。私の場合をいうと、私はそのはけ口を推理小説に求めている。推理小説を読むことによって、私は一方で殺人者の気持になり、また一方では人間狩りの探偵の気持にもなり、それによって残虐本能を排除することができるのである」。

5)大江健三郎『持続する志』(株式会社文藝春秋, 1968年10月刊 543pp.)]

「持続する志(pp.55-59)の一部」

……。『世界』(岩波書店)二百号の総目次は、また、その一号、一号が、その時々
のアクチュアリティの全体を幅広く至当な距離からとらえている雑誌でもあること
を示している。……

たまたま僕がアメリカに滞在しているあいだに『ネーション(Nation)』誌の創刊
百周年記念号が発行された。アメリカの時代の振れのもっとも激しい百年を批判
的にカヴァーし続けたこの総合誌の記念号は、その時々
の論説を再録して感銘深いものであった。バートランド・ラッセル卿は『ネーション』誌の百年間に渡る、
個人の自由と社会の公正のために持続された声をたたえ、アメリカの「**圧制と頑迷の climate**」が一層あきらかにしてきた、この雑誌の **independent** の急進的な考
え方、率直さを評価する祝詞をよせた。(終)